高　等　学　校

令和４年度

教育研究員研究報告書

国　語

東京都教育委員会

目　次

Ⅰ　研究主題設定の理由 ･････････････････････････････････ 1

Ⅱ　研究の視点 ･･･ 2

Ⅲ　研究の仮説 ･･･ 3

Ⅳ　研究の方法 ･･･ 3

Ⅴ　研究の内容 ･･･ 6

Ⅵ　研究の成果 ･･･ 13

Ⅶ　今後の課題 ･･･ 16

研究主題	生徒の思いや考えを広げたり深めたりするための 「話すこと」の指導の工夫と学習評価の充実

Ⅰ　研究主題設定の理由

１　学習指導要領改訂と「令和の日本型学校教育」

「高等学校学習指導要領（平成30年３月）」（以下、「高等学校学習指導要領」と表記。）においては、全教科・科目等において、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱で育成を目指す資質・能力を整理して示すとともに、「主体的・対話的で深い学び」の視点に基づく授業改善を求めている。

今回の改訂において、国語科は科目構成の大幅な変更が行われている。改訂の趣旨において高等学校国語の指導については、教材に依存した読むことに偏った指導が行われていると指摘されており、その改善を図るねらいがある。さらに、令和３年１月に示された中央教育審議会答申「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）」（以下「答申」という。）では、育むべき資質・能力について以下のように示されている。

- 我が国の学校教育には、一人一人の児童生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるよう、その資質・能力を育成することが求められている。
- 次代を切り拓く子供たちに求められる資質・能力としては、文章の意味を正確に理解する読解力、教科等固有の見方・考え方を働かせて自分の頭で考えて表現する力、対話や協働を通じて知識やアイディアを共有し新しい解や納得解を生み出す力などが挙げられた。

２　高校部会の共通のテーマ

高等学校は中等教育の最終段階である。高等学校という発達の段階を考えたときに、「これからの社会を主体的・創造的に生き抜いていく子供の育成」に必要なものとは、社会人として必要な「資質・能力」を身に付けていくことである。このことから、高校部会の共通テーマを「これからの社会を主体的・創造的に生き抜くために必要な『資質・能力』の育成に向けた授業改善と学習評価の充実について」とし、研究を進めた。

３　生徒の現状と国語科の指導上の課題

研究主題を定めるに当たり、研究員の所属校の生徒の現状と課題を基に協議を行った。協議では「主体的・創造的な資質・能力」に関わる指導場面の課題として、「当事者意識をもって考えさせることが難しい。」「独自の解釈に拘泥することがある。」「他者の意見を聞いて自分の考えを修正する力を付けていく必要がある。」といったものが挙げられた。

また、中学校からの接続を考えるため、「令和３年度全国学力・学習状況調査報告書（中学校国語）」を確認した。そこでは、各領域の「指導改善のポイント」として、

- 話合いを効果的に進め、互いの発言を踏まえて、考えをまとめたり広げたり深めたり

する指導の工夫

・　読み手の立場に立ち、自分が書いた文章について捉え直し、分かりやすい文章に整える指導の工夫

・　文章の内容を理解したり自分の考えを形成したりする指導の工夫

・　敬語などの相手や場に応じた言葉遣いを理解し、適切に使う指導の工夫

の４点を挙げている。

以上を踏まえ、生徒の現状と国語科の教科指導上の課題を次のように整理した。

【生徒の現状】

・　他者に話す際に、自分の立場や考えを明確にすることが十分できていない。

・　相手の反応を予想して論理の展開を考えるなど、他者を意識した話の構成や展開の工夫が十分できていない。

【国語科の指導上の課題】

・　伝え合う力を高める言語活動を充実させ、他者との関わりの中で自分の思いを広げたり深めたりする力を育成するための授業改善が必要である。

・　言語能力の確実な育成を図る見通しと振り返りができるよう、育成を目指す資質・能力を明確にして観点別学習状況の評価の充実を図ることが必要である。

４　主題設定の理由

今回の高等学校学習指導要領国語の改訂の背景には、「読むこと」以外の指導が十分行われていないという課題意識がある。中でも「話すこと・聞くこと」については、先行研究が少ないという実態がある。生徒の現状及び指導上の課題と改訂の趣旨とを踏まえ、これからの社会を主体的・創造的に生き抜いていくための資質・能力を向上させるために、「話すこと・聞くこと」の領域の指導の充実が必要であると考えた。特に、生徒の現状の中の「他者を意識した話の構成や展開の工夫」に課題があることを踏まえ、「話すこと」の領域を指導していく必要性を考え、研究主題を「生徒の思いや考えを広げたり深めたりするための『話すこと』の指導の工夫と学習評価の充実」とし、研究を進めた。

Ⅱ　研究の視点

１　研究の着眼点

本研究では、生徒の現状や国語科の指導上の課題を踏まえ、「高等学校学習指導要領」における国語科の目標の一つである「生涯にわたる社会生活における他者との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を伸ばす」に着目し、「話すこと・聞くこと」の領域における指導の工夫と評価の充実により、資質・能力の育成を図ることができると考えた。

２　「話すこと」の指導の工夫

「話すこと」の領域の中で、特に「構成の検討、考えの形成」の学習過程に焦点を当てた指導を行うことにより、生徒の現状の「相手の反応を予想して論理の展開を考えるなど、他者を意識した話の構成や展開の工夫が十分できていない。」ことに向き合った指導となると

考えた。そのため、話す内容の構成の検討や、考えの形成ができる教材の工夫を行った。

３　学習評価の充実

資質・能力の着実な育成を図るためには指導と評価の一体化が不可欠である。指導したことの成果を評価するという視点から、特に、「思考・判断・表現」の適切な評価に当たっては生徒が思考・判断・表現する場面を効果的に設定することが求められる。

また、「主体的に学習に取り組む態度」としては、生徒自身が「知識及び技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりすることに向けた粘り強い取組を行おうとしている」[1]ことやその粘り強い取組を行う中で「自らの学習を調整しようとする」[2]部分を見取る必要がある。そのため、次のような視点で学習評価の充実を図ることとした。

- 単元の評価規準を学習の初めに示し、目的や目標を明確にする。
- 学習を通じた自己変容を可視化できるよう教材を工夫する。

Ⅲ　研究の仮説

「Ⅱ　研究の視点」を踏まえ、本研究における仮説を次のように設定した。

- 「話すこと」に必要な資質・能力として構成の検討や考えの形成を指導することで、他者を意識しながら、自分の考えを的確に伝える力を育成し、自分の思いや考えを広げたり深めたりさせることができる。
- 単元の評価規準を学習の初めに示してから「話すこと」の構成を行い、学習後に振り返りを行うことで、学習前後の自己変容を実感させることにつながる。このような観点別学習状況の評価を充実することで、言語能力の確実な育成を図ることができる。

Ⅳ　研究の方法

１　具体的方策

本研究の仮説を検証するために、以下のような学習活動を設定し、生徒の変容を分析する。

(1)　相手に的確に伝えることを目的として、自分の考えについてスピーチを行い、質問を受ける言語活動を行わせる。その際、話す内容の構成に着目させ、どのような構成が効果的であるかを考えさせる。

(2)　ルーブリックを活用し、学習の過程において他者による評価を参考にして自己の学習を調整させる。学習後に自己評価をさせるとともに、教師による観点別学習状況の評価を行う。

２　検証方法

(1)　仮説に基づく「ワークシート」の使用の有無による変化を見取る。また、検証授業の事

---

[1] 国立教育政策研究所教育課程研究センター令和４年１月「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料【高等学校　国語】による

[2] 脚注１参照

前・事後でアンケートを取り、生徒の変容を検証する。

(2)　「ワークシート」を活用し、構成や自身の考えについて、言語活動の前後での変化を見取り、言葉のもつ価値への認識の深まりや、生徒自身の思いや考えの広がりを検証する。

3　「ワークシート」

実践例では以下のような「ワークシート」を用いた。

テーマ：○○について、クラスメイトに話してみよう

手順０　話すための材料を集めよう（ブレーンストーミングなどで、材料を集めよう）

手順①　話す構想を練ろう

実践事例１	実践事例２	実践事例３
１　主張を考える ２　自分の考えや立場を明確にする ３　聞く人の反応を予想し話の構成や展開を工夫する	１　主張を考える ２　提示された項目ごとに話す内容を検討する ３　聞く人の反応を予想し、話の構成や展開を工夫する	１　主張を考える ２　主張を支える根拠の検討をする ３　聞く人の反応を予想し、話の構成や展開を工夫する

手順②　①の構想をもとに話してみよう
話すときに気を付けること：話す順序・一文の長さ、態度や言葉遣い・表現

手順③　構想の再検討をしよう
付箋やコメントシートなど聞き手のリフレクションを貼付する

手順④　単元の振り返りをしよう
１　構想について
　主張や根拠を明確することができたか、聞き手の反応を予想して話す内容を考えられたか
２　話すことについてよくできたと思うもの
　話す順序、一文の長さ、言葉遣い、聞き手を意識した表現、話す態度
３　他の発表を聞いて参考になった点（自由記述）

ルーブリック貼付欄

4　ルーブリック評価表

スピーチにおけるルーブリック評価表は次のものを提示した。

観点	評価基準		
	A（十分満足できる）	B（おおむね満足できる）	C（努力を要する）
知識・技能	・主張を支える根拠・理由についてより詳細に記述できている。 ・話す順序や言葉遣い・表現等について見直したり、調べたりしながら、効果的な話し方を検討できている。	・主張を支える根拠・理由について記述できている。 ・話す順序や言葉遣い・表現等に注意して話し方を検討できている。	・主張を支える根拠・理由について記述できていない、もしくは不十分である。 ・話す順序や言葉遣い・表現等に注意して話し方を検討できていない、もしくは不十分である。
思考・判断・表現	・自分の立場や考えを説得力のある根拠・理由を示して明確にすることができている。 ・話の構成や展開を工夫したり、相手の反応を予想したりしながら、相手にとって自分の考えがより伝わりやすくなるよう検討することができている。	・自分の立場や考えを明確にすることができている。 ・自分の考えがより伝わりやすくなるにはどうしたらよいか考えながら、構成や展開を検討している。	・自分の立場や考えを明確にすることができていない、もしくは不十分である。 ・自分の考えがより伝わりやすくなるための構成や展開を工夫できていない、もしくは不十分である。
主体的に学習に取り組む態度	・言葉を工夫して伝えることの大事さを理解し、自分や相手の言葉から様々なことを感じることができている。	・言葉を工夫して伝えることの大事さを理解できている。	・言葉を工夫して伝えることの効果を理解できていない、もしくは不十分である。

研究構想図

全体テーマ　「これからの社会を主体的・創造的に生き抜いていく子供の育成」

高校部会テーマ

「これからの社会を主体的・創造的に生き抜くために必要な『資質・能力』の育成に向けた授業改善と学習評価の充実について」

各教科等における「これからの社会を主体的・創造的に生き抜くために必要な『資質・能力』」

【知識及び技能】実社会を生き抜くために必要な国語の知識や技能

【思考力、判断力、表現力等】自分の思いや考えを広げたり深めたりするために、他者との関わりの中で伝え合う力

【学びに向かう力、人間性等】言葉がもつ価値への認識を深め、言葉を通して他者や社会に関わろうとする態度

高校部会テーマにおける現状と課題

【生徒の現状】

- 他者に話す際に、自分の立場や考えを明確にすることが十分できていない。
- 相手の反応を予想して論理の展開を考えるなど、他者を意識した話の構成や展開の工夫が十分できていない。

【国語科における指導上の課題】

- 伝え合う力を高める言語活動を充実させ、他者との関わりの中で自分の思いを広げたり深めたりする力を育成するための授業改善が必要である。
- 言語能力の確実な育成を図る見通しと振り返りができるよう、育成を目指す資質・能力を明確にして観点別学習状況の評価の充実を図ることが必要である。

高等学校国語部会研究主題

生徒の思いや考えを広げたり深めたりするための「話すこと」の指導の工夫と学習評価の充実

仮　　説

- 「話すこと」に必要な資質・能力として構成の検討や考えの形成を指導することで、他者を意識しながら、自分の考えを的確に伝える力を育成し、自分の思いや考えを広げたり深めたりすることができる。
- 単元の評価規準を学習の初めに示してから「話すこと」の構成を行い、学習後に振り返りを行うことで、学習前後の自己変容を実感させることにつながる。このような観点別学習状況の評価の充実を図ることで、言語能力の確実な育成を図ることができる。

研究方法

〔具体的方策〕

- 相手に的確に伝えることを目的として、自分の考えについてスピーチを行い、質問を受ける言語活動を行う。その際、話す内容の構成に着目し、どのような構成が効果的であるかを考えさせる。
- ルーブリックを活用し、学習の過程において他者による評価を参考にして自己の学習を調整させる。学習後に自己評価をさせるとともに、教師による観点別学習状況の評価を行う。

〔検証方法〕

- 検証授業の事前・事後で一人１台端末を用いてアンケートを取り、生徒の変容を検証する。
- 「ワークシート」を活用し、構成や自身の考えについて、言語活動の前後での変化を見取り、言葉のもつ価値への認識の深まりや、生徒自身の思いや考えの広がりを検証する。

Ⅴ　研究の内容

１　予備実践

(1)　予備実践の位置付けについて

予備実践は仮説の検証に入る前に、仮説の妥当性を確かめるために行った。この実践では、次の三つのグループに分けて実践を行った。なお、各グループの生徒に対しては、学習内容や取組に差異が生じないようにするため、検証後に適切な支援を行った。

A（仮説に基づき、ルーブリック評価表により評価規準を示してから「ワークシート」を用いて構成を検討させ、振り返りを行うグループ（実践事例１、２と同様）

B（ルーブリック評価表や「ワークシート」を用いず、テーマだけを与えて話す活動を行い、振り返りも行わないグループ

C（ルーブリック評価表の内容を生徒自身に考えさせ、そのルーブリック評価表と「ワークシート」を用いて話す内容を構成させ、振り返りを行うグループ

これらのグループ別に指導を行い、事前事後の振り返りでどのような変化が見られるかを見取った。次に示す指導案はグループＡのものである。

教科名	国語	科目名	国語表現	学年	第３学年

(2)　単元の目標

ア　話し言葉と書き言葉の特徴や役割、表現の特色について理解を深め、伝え合う目的や場面、相手、手段に応じた適切な表現や言葉遣いを理解し、使い分けることができる。

（知識及び技能）（１）イ

イ　自分の思いや考えが伝わるよう、具体例を効果的に配置するなど、話の構成や展開を工夫することができる。（思考力、判断力、表現力等）Ａウ

ウ　進んで話し言葉や表現の特色を理解して使い分けようとし、学習の意通しをもってより自分の思いや考えが伝わるよう構成や展開を工夫して話そうとしている。

（学びに向かう力、人間性等）

(3)　単元名

現代の諸問題についてよりよい構成を検討してスピーチをしよう

(4)　単元の評価規準

ア　知識・技能	イ　思考・判断・表現	ウ　主体的に学習に取り組む態度
話し言葉と書き言葉の特徴や役割、表現の特色について理解を深め、伝え合う目的や場面、相手、手段に応じた適切な表現や言葉遣いを理解し、使い分けている。（（１）イ）	話すことにおいて自分の思いや考えが伝わるよう、具体例を効果的に配置するなど、話の構成や展開を工夫している。（Ａウ）	進んで話し言葉や表現の特色を理解して使い分けようとし、学習の見通しをもってより自分の思いや考えが伝わるよう構成や展開を工夫して話そうとしている。

(5)　単元の指導と評価の計画（２時間扱い）

時間	学習活動	評価の観点			評価規準 （評価方法など）
		ア	イ	ウ	
第１時	・話すことの手順とそれに必要な資質・能力を知る。 ・ルーブリックと評価規準を理解し、学習の見通しをもつ。 ・テーマについて原稿メモを作る。	●			ア（記述の分析《「ワークシート」》）
第２時（本時）	・４人グループでスピーチの相互発表を行う。聞いている生徒は内容のメモを取る。 ・スピーチの構成と内容に関する相互評価を行う。 ・ルーブリックによる自己評価を行う。		●	●	イ（記述の分析《「ワークシート」》） ウ（行動の分析《スピーチ》）

(6)　本時（全２時間中の２時間目）

ア　本時の目標

話し言葉の特質を踏まえ、段落と段落の関係や主張を支える論理を工夫して、スピーチする。

イ　仮説に基づく本時のねらい

話すことに必要な資質・能力を指導することで、段落と段落の関係や主張を支える論理を工夫してスピーチを行えると考えてねらいを設定した。また、「ワークシート」は、接続詞に注目させることで段落と段落の関係をより意識してスピーチの構成を検討できるようにした。

ウ　本時の展開

	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価規準・方法
導入	・本時の流れを確認し、ルーブリックと評価規準を復習する。	・学習の流れと目的を伝える。	
展開	・４人グループでスピーチの相互発表を行う。聞いている生徒は内容のメモを取る。 ・スピーチの構成と内容に関する相互評価を行う。	・スピーチの構成や展開を意識して話したり聞いたりできるよう助言する。	ウ（行動の分析《スピーチ》）
まとめ	・ルーブリックによる自己評価を行う。	・相互に取ったメモを交換させ、相手にどう伝わっているか確認するよう指示する。	イ（記述の分析《「ワークシート」》）

(7)　本時の振り返り

ア　「ワークシート」について

スピーチの前後で話の構成や考えの変化を見取るために「ワークシート」を使用した。スピーチの原稿作成についてほとんどの生徒が展開を検討できた。

イ　評価について

「ワークシート」の原稿メモを「思考・判断・表現」の評価に、生徒の自己評価と他者によるスピーチメモを「主体的に学習に取り組む態度」の評価に使用した。観点別学習状況の評価だけでなく、本単元の目標である言葉遣いや構成・展開の工夫について、全クラス同一の基準で講評を行うことができた。

ウ　アンケートの結果について

本単元の前後に行ったアンケート（表１）では、仮説に基づく実践を行った「グループＡ」では「①反論を想定した説明や、根拠・具体的場面を挙げるなど、主張を支える論理

を工夫することができる」が13ポイント、「②話し言葉の特質を踏まえて、段落と段落の関係を工夫するなど、話の構成や展開を検討することができる」が35ポイント増加し、ねらいのとおりの資質・能力を身に付けられたと実感する生徒が多かった。

一方で、対照となるように行った「グループＢ」ではそれぞれ８ポイント減、17ポイント増であり、「グループＣ」でも８ポイント増、30ポイント増にとどまった。

特に「グループＢ」では、主張にその理由や具体例を複数添えるに留まるスピーチが多く、論展開により主張の説得力を増したり、新規性のある具体例を挙げて聴衆の注目を集めたりすることまで工夫できたものは少なかった。一方、「グループＣ」では生徒が自身の課題意識に基づいて目標を立てたが、「根拠と理由を明確に述べる」、「皆が納得できる具体例を挙げる」など、指導者が評価基準でＢ程度とした目標を立てる生徒が多く、具体例の質や反論の想定などの観点までは検討できなかったことが、事後アンケートの結果につながったと考えられる。

この結果から仮説の妥当性を確認し、実践事例１、２を行った。

表１　授業前後のアンケート結果の比較

予備実践	項目	とても思う	やや思う	あまり思わない	まったく思わない	わからない	肯定的な回答
事前	①	14%	66%	19%	0.5%	0.5%	
	②	9%	46%	41%	0%	4%	
グループＡ（仮説）	**①**	**33%**	**60%**	**6%**	**0%**	**1%**	**13p**
	②	**37%**	**53%**	**7%**	**0%**	**3%**	**35p**
グループＢ（ルーブリック・ワークシートなし）	①	6%	66%	22%	6%	0%	−8p
	②	3%	69%	28%	0%	0%	17p
グループＢ２回目	①	20%	66%	12%	0%	2%	6p
	②	23%	66%	8%	0%	3%	34p
グループＣ（ルーブリック自作・ワークシートなし）	①	10%	78%	11%	0%	1%	8p
	②	14%	71%	8%	1%	6%	30p

項目① 反論を想定した説明や、根拠・具体的場面を挙げるなど、主張を支える論理を工夫することができる
項目② 話し言葉の特質を踏まえて、段落と段落の関係を工夫するなど、話の構成や展開を検討することができる

２　実践事例１

教科名	国語	科目名	現代の国語	学年	第１学年

(1)　単元の目標

ア　話の効果的な組み立て方や接続の仕方について理解する。　（知識及び技能）(1)オ

イ　自分の立場や考えを明確にして、相手の反応を予想しながら、話の構成や展開を工夫する。　（思考力、判断力、表現力等）Ａ(1)イ

ウ　言葉を通して言葉のもつ価値を認識しようとしたり他者や社会に関わろうとしたりしている。　（学びに向かう力、人間性等）

(2)　単元名

アイデンティティを基礎付けるものについて、自分の考えを話す

(3)　単元の評価規準

ア　知識・技能	イ　思考・判断・表現	ウ　主体的に学習に取り組む態度
話や文章の効果的な組み立て方や接続の仕方について理解している。((1)オ)	話すことにおいて自分の考えが的確に伝わるよう、自分の立場や考えを明確にするとともに、相手の反応を予想して論理の展開を考えるなど、話の構成や展開を工夫している。(Ａ(1)イ)	進んで自らの考えを形成しようとし、学習の見通しをもってより的確に相手に伝えるための構成や展開を工夫して話すことで、言葉のもつ価値への認識を深めている。

(4)　単元指導計画と評価の計画（３時間扱い）

時間	学習活動	評価の観点			評価規準（評価方法）
		ア	イ	ウ	
第１時	・アイデンティティは何によって基礎付けられるのか、ブレーンストーミングを行い、「話す」内容を検討する。 ・「話す」ことの構想を相手の反応を予想しながら考える。	●			ア （記述の分析《「ワークシート」》）
第２時（本時）	・前時の「ワークシート」を確認する。 ・グループで「話す」実践をする。 ・聞き手のコメントシートから話の構成・展開を再検討する。		●		イ （記述の分析《「ワークシート」》）
第３時	・再検討した「話す」内容や構成・展開を振り返る。 ・「話す」前と後で変化した点を考える。 ・「話す」実践を通して、言葉の価値や自分の思いや考えの深まりについてまとめる。			●	ウ （記述の分析《「ワークシート」》）

(5)　本時（全３時間中の２時間目）

ア　本時の目標

スピーチを行い、「話すこと」の再検討を通して、話の構成や展開を工夫する。

イ　仮説に基づく本時のねらい

話すことに必要な手順を具体的に示すことで、自分の立場や考えを明確にしながら、話す内容や構成を工夫したり、自分の考えをよりよく話したりすることができると考えてねらいを設定した。「ワークシート」の手順に沿って話すことのメモを作成しながら、学習活動では他者との伝え合いを記録できるようにした。また、話の構成や展開を工夫する時に振り返りができるように聞き手による振り返りを付箋に書かせ、発表者に渡した。

ウ　本時の展開

	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価規準・方法
導入	・前時の復習と本時の学習内容を確認する。 ・話す内容や話す順序を再確認する。	・学習の流れと目的を伝える。	
展開	・「話す」実践を４人グループで行い、１人ずつ話す。 ・聞き手はコメントシートと付箋にコメントを記入する。 ・聞き手のコメントから話し手が話す内容の再検討を行い、工夫できる点を考える。 ・「ワークシート」に加筆修正をする。	・話の聞き方を確認する。 ・付箋を「ワークシート」に貼付する。 ・赤ペンで加筆修正する。	イ （記述の分析《「ワークシート」》）
まとめ	・聞き手のアドバイスによって気が付いたことや参考になったことを振り返り項目に記入して、自己評価を行う。 ・学習の振り返りを行う。	・単元の振り返りを行い、自己評価をする。	

(6)　本時の振り返り

ア　評価について

仮説のとおり、ルーブリック評価表を提示したことにより、学習活動に入る時に、見通しを立てながら学習に取り組むことができていた。

イ　アンケートの結果について

（表２）の事前アンケート②の項目では 43%と肯定的な回答が低かった。事後アンケートでは①と②の項目共に肯定的な回答が増え、特に②の項目は 44 ポイント増えている。話の構成や論理の展開を工夫することに対して、意識的でなかった生徒に意識付けができたと考えられる。しかしながら、話すことを通して自己変容ができたかどうかに課題があった。それを実感させていくためにはさらに協働的な学習活動の設定が重要である。

表２　授業前後のアンケート結果の比較

	項目	とても思う	やや思う	あまり思わない	まったく思わない	分からない	肯定的な回答
事前	①	11%	49%	32%	4%	4%	
	②	14%	29%	46%	7%	4%	
事後	①	21%	66%	13%	0%	0%	13p
	②	21%	66%	13%	0%	0%	44p

事前①　話す時に、自分の立場や考えを明確にして話すことを意識していますか。
事前②　話す時に、相手の反応を予想して論理の展開を考えるなど、話の構成等を工夫して話すことを意識していますか。
事後①　授業を受けて、自分の立場や考えを明確にして話すことができましたか。
事後②　授業を受けて、相手の反応を予想して論理の展開を考えるなど、話の構成等を工夫して話すことができましたか。

３　実践事例２

教科名	国語	科目名	現代の国語	学年	第１学年

(1)　単元の目標

ア　話の効果的な組み立て方や接続の仕方について理解する。　（知識及び技能）（１）オ

イ　自分の考えが的確に伝わるよう、自分の立場や考えを明確にするとともに、相手の反応を予想して論理の展開を考えるなど、話の構成や展開を工夫する。

（思考力、判断力、表現力等）Ａ（１）イ

ウ　言葉のもつ価値への認識を深めるとともに、生涯にわたって読書に親しみ自己を向上させ、我が国の言語文化の担い手としての自覚をもち、言葉を通して他者や社会に関わろうとする。　（学びに向かう力、人間性等）

(2)　単元名

職業人調べで気付いたことを話して伝える

(3)　単元の評価規準

ア　知識・技能	イ　思考・判断・表現	ウ　主体的に学習に取り組む態度
話の効果的な組み立て方や接続の仕方について理解している。（（１）オ）	話すことにおいて自分の考えが的確に伝わるよう、自分の立場や考えを明確にすると共に、相手の反応を予想して論理の展開を考えるなど、話の構成や展開を工夫している。（Ａ（１）イ）	進んで自らの考えを形成しようとし、学習の見通しをもってより的確に相手に伝えるための構成や展開を工夫して話そうとしている。

(4)　単元指導計画と評価の計画（３時間扱い）

時間	学習活動	評価の観点			評価規準（評価方法）
		ア	イ	ウ	
第１時	・職業人インタビューの内容を基に、自らの考えをまとめ、スピーチの組み立てを考える。	●			ア（行動の観察）
第２時（本時）	・相手の反応を予想しながら話すことの構想を考え、構成メモを作成する。 ・グループで「話す」実践をし、他者の評価から話す内容や構成・展開を再検討する。		●		イ（記述の分析《「ワークシート」》）
第３時	・再構成した内容でスピーチの発表を行う。（動画による発表を含む。） ・単元の振り返りを行う。			●	ウ（記述の分析《「ワークシート」》）

(5)　本時（全３時間中の２時間目）

ア　本時の目標

職業人について自分の考えを話す活動を通じて、話の構成を再検討することができる。

イ　仮説に基づく本時のねらい

インタビューを通じて得た様々な情報を「ワークシート」に沿ってまとめさせることで、効果的なスピーチの方法について自ら考えを深めることができると考え、学習活動を設定した。実際にグループで話す実践を行った上で、構成や展開を再検討することができたかを「ワークシート」の記述を基に確認する。

ウ　本時の展開

	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価規準・方法
導入	・本時の目標とスピーチの流れを説明する。	・話合いの際に使用する「ワークシート」を配布する。 ・各自が調べてきたものを確認し、班ごとに話し合い、発表の準備を行うことを伝える。	
展開	・「ワークシート」に沿って、話す手順を考える。 ・グループの中で自分の調べてきた「職業人」について自分の考えを発表する。 ・「話すこと」の構想を再検討し、話の構成や展開で工夫できる点を考える。	・机間指導を行い、生徒の取組を確認する。 ・話す内容を再検討する際、工夫する点等を、赤ペンで「ワークシート」に直接書き込むように伝える。	イ（記述の分析《「ワークシート」》）
まとめ	・ルーブリックで自己評価を行う。 ・本時の学習を振り返り、次時の学習について見通しをもつ。	・動画提出を希望する生徒は次時までにICT 機器によりスピーチ動画を撮影し、提出するよう指示する。	

(6)　本時の振り返り

ア　「ワークシート」について

実際にグループで話す実践を行った上で、グループのメンバーから付箋でアドバイスをもらって貼るように工夫した。単元の振り返りも含め、表裏１枚の「ワークシート」で完結できるようにした。自らインタビューを行った内容を扱うことで、情報の取捨選択を行う生徒も多く見られ、構成の工夫の検討という本単元の目標に合致した学習活動となった。

イ　教材・教具の活用について

本単元では「ワークシート」及び一人１台学習者用端末を活用した。また、話す題材として進路指導で行った「職業人へのインタビュー」の内容を活用した。

「ワークシート」により、学習過程を明確にし、学習内容に焦点を当てながらスピーチの実践を行うことができた。ルーブリック評価表については、端的な説明で学習の見通しをもたせることができ、生徒一人一人が学習を調整することの一助となったと考えられる。

教具について一人１台学習者用端末を使用し、スピーチの動画提出を行わせた。動画を作成する過程で、自分の表現を省察することを促すことができた。

ウ　評価について

事前に生徒にルーブリックを渡し、スピーチ後に自己評価を行わせた。ルーブリックを使用したことで、生徒自身が学習を調整しようする姿勢を測る指標となり、「主体的に学習に取り組む態度」を測る際に活用できた。「思考・判断・表現」については、スピーチの内容と構成の工夫を評価した。「ワークシート」や一人１台端末の活用により、評価の場面を精選することにつながり、適切な評価へとつながった。

エ　アンケートの結果について

事前・事後アンケート（表３）の肯定的な回答の割合を比較すると、「①自分の立場や考えを明確にして話すこと」については事後アンケートがマイナス４ポイント、「②相手の反応を予想して論理の展開を考えるなど、話の構成等を工夫して話すこと」については10ポイント増となった。②について、特に構成を意識することができるようになったことが分かる。

表３　授業前後のアンケート結果の比較

	項目	とても思う	やや思う	あまり思わない	まったく思わない	分からない	肯定的な回答
事前	①	22%	60%	13%	1%	4%	
	②	17%	45%	33%	2%	3%	
事後	①	13%	65%	13%	5%	4%	−4p
	②	13%	59%	20%	3%	5%	10p

事前① 話す時に、自分の立場や考えを明確にして話すことを意識していますか。
事前② 話す時に、相手の反応を予想して論理の展開を考えるなど、話の構成等を工夫して話すことを意識していますか。
事後① 授業を受けて、自分の立場や考えを明確にして話すことができましたか。
事後② 授業を受けて、相手の反応を予想して論理の展開を考えるなど、話の構成等を工夫して話すことができましたか。

Ⅵ　研究の成果

１　仮説「話すことに必要な資質・能力として構成の検討や考えの形成を指導することで、他者を意識しながら、自分の考えを的確に伝える力を育成し、自分の思いや考えを広げたり深めたりさせることができる。」の検証

(1)　アンケート結果の分析（表４・５）

ア　表４　事前アンケートの結果

実践事例１・２共に項目①について肯定的回答の割合が比較的高く、生徒が普段から自分の立場や考えを明確にして話すことに意識的であることが分かる。それに対して項目②については否定的回答の割合が比較的高く、話の構成や論理の展開について意識をしている生徒が比較的少ないことが分かる。

イ　表５　事後アンケートの結果

実践事例１・２共に項目①については肯定的回答の割合が高く、生徒が授業を通じて自分の立場や考えを明確にして話すことができるようになったという実感をもっていることが分かる。同様に項目②についても肯定的割合が高く、生徒が授業を通じて話の構成や論理の展開を工夫して話すことができるようになったという実感をもっていることが分かる。

事前アンケートと事後アンケートの結果から、普段は「自分の立場や考えを明確にしたり､話の論理や展開を工夫したりすること｣を十分に意識できていなかった生徒について、「話すことに必要な資質・能力として構成の検討や考えの形成を指導する」授業を行うことで､「他者を意識しながら、自分の考えを的確に伝える力」を育成することができたと言える。

表４　事前アンケートの結果

実践	項目	とても意識している	やや意識している	あまり意識していない	全く意識していない	分からない・考えたことがない	肯定的回答	否定的回答
1	①	11%	49%	32%	4%	4%	60%	36%
	②	14%	29%	46%	7%	4%	43%	53%
2	①	22%	60%	13%	1%	4%	82%	14%
	②	17%	45%	33%	2%	3%	72%	35%

項目① あなたはスピーチなどで話す時に、自分の立場や考えを明確にして話すことを意識していますか。
項目② あなたはスピーチなどで話す時に、相手の反応を予想して論理の展開を考えるなど、話の構成や論理の展開を工夫して話すことを意識していますか。

表５　事後アンケートの結果

実践	項目	とても そう思う	やや そう思う	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	わからない	肯定的 回答	否定的 回答
1	①	21%	66%	13%	0%	0%	87%	13%
	②	21%	66%	13%	0%	0%	87%	13%
2	①	13%	65%	13%	5%	4%	78%	18%
	②	13%	59%	20%	3%	5%	72%	23%

項目①　今回「話すこと」に関する授業を受けたことで、自分の立場や考えを明確にして話すことができるようになったと思いますか。

項目②　今回「話すこと」に関する授業を受けたことで、相手の反応を予想して論理の展開を考えるなど、話の構成や論理の展開を工夫して話すことができるようになったと思いますか。

(2)　「単元の振り返り」の分析（表６・７）

まず表６にあるとおり、実践事例によってルーブリックの提示の仕方に差があることを確認しておく。生徒の課題意識は「構成に関すること」「表現の仕方」に大別できるが、ルーブリックの提示に時間をかけた事例１では、表７の項目①②共に「構成」への課題意識が強い。一方、ルーブリックの提示時間が比較的少なく、日常的にスピーチの練習を行っている事例２では、項目①②共に「表現の仕方」への課題意識が強かった。

以上のことから、「話すこと」の指導として身に付けさせたい資質・能力を明確にすることの重要性が見えてくる。学習指導要領において、「現代の国語」の「話すこと」の領域はその学習過程に応じて「話題の設定、情報の収集、内容の検討」「構成の検討、考えの形成」「表現、共有」の三つの過程に分けて資質・能力を明示している。また、この「思考力・判断力・表現力等」は「知識及び技能」の「(1)言葉の特徴や使い方に関する事項」と関連を図りながら指導することとしている。事例２では、ルーブリックを提示したものの、「話すこと」よりも「知識及び技能」に意識がいってしまった生徒がいたことから、「表現の仕方」に課題意識をもったと考えられる。単元の学習の目標をより端的に生徒に提示することで身に付けさせたい資質・能力を明確にした指導につながると考える。

なお、表には掲載していないが、「単元の振り返り」には「クラスメイトの話を聞いて、心に残った点があれば書いてください。」という自由記述欄も設けた（回答率は、事例１　68%、２　61%）。事例１、２共に具体的な記述が多かったものの、特定の内容や個人の発表に言及が偏る傾向が見られた。生徒の価値観やものの見方を広げたり、深めたりするためには、題材の設定に一層の工夫が必要だと考えられる。

表６　各実践校における取組状況の比較

実践	本単元ルーブリックの説明にかけた時間	国語の授業外での活動
1	15 分程度（単元のはじめに教員が読み、自己評価時に再度生徒が読んだ。）	特段の取組なし。
2	５分程度 （単元のはじめに教員が読み上げた。）	進路指導の一環として、ＨＲ活動でプレゼンテーションの練習を実施。

表７　「単元の振り返り」自由記述欄の分析結果

項目	実践	有効回答数	生徒の課題意識	生徒の課題意識　上位３回答 （＊印は構成に関わること」 （無印は表現の仕方に関わること）
①自分が話す際の課題	1	21	構成　　67% 表現の仕方　33%	＊意見の明確さ（24%） 声量（19%） ＊具体例の入れ方・＊反応の予測（14%）
	2	32	構成　　28% 表現の仕方　69%	緊張（22%） 目線（19%） ＊意見の明確さ（13%）
②クラスメイトの「話し方」で参考になった点	1	44	構成　　68% 表現の仕方　33%	＊意見の明確さ（23%） ＊具体例の入れ方（23%） 聞き手への問いかけ（10%）
	2	28	構成　　18% 表現の仕方　82%	物・ジェスチャー（25%） 自然な話し方（14%） 目線（７%）

２　仮説「単元の評価規準を学習の初めに示してから「話すこと」の構成を行い、学習後に振り返りを行うことで、学習前後の自己変容を実感させることにつながる。このような観点別学習状況の評価の充実を図ることで、言語能力の確実な育成を図ることができる。」の検証

(1)　アンケート結果の分析（表４・５）

今回、ルーブリックで示した評価規準を「ワークシート」、「他己評価」、「単元の振り返り」に反映させることで、生徒は単元の評価規準を意識しつつ学習に取り組むことができた。表４・５のアンケート結果から見て取れるように、生徒は学習を調整し、その結果として自己変容を実感できたと考えられる。

(2)　「単元の振り返り」の分析（表８）

表８にあるとおり、実践事例１、２の「単元の振り返り」において、自らの課題意識及び他者から学んだ点として挙げられた延べ26項目のうち、最も多かったのは「意見の明確さ」（17%）、次いで「具体例の入れ方」（11%）であった。このことからも、生徒が単元の評価規準を基に自らの学習を調整したことが見取れる。「言語能力」を構成する要素は多岐にわたるが、今回の研究において生徒は特に、自分の考えをまとめ、伝えることの価値に気付いたと言える。ルーブリックなどを用いて「主体的に学習に取り組む態度」を適切に見取っていくなど、観点別学習状況の評価を充実させることは、言語能力の確実な育成に資すると言うことができる。

表８　実践１，２の「単元の振り返り」において挙がった課題意識（上位 15 項目）

○構成に関わること	意見の明確さ（17%）、具体例の入れ方（11%）、反応の予測（６%） 内容の密度（３%）、準備（３%）、話す順序（３%）
○表現の仕方に関わること	目線（９%）、物・ｼﾞｪｽﾁｬｰ（９%）、緊張（６%）、声量（５%）、はっきり話す（５%）、問いかけ（４%）、自然な話し方（３%）、言葉遣い（３%）、ユーモア（３%）

Ⅶ　今後の課題

１　「話すこと・聞くこと」に関する教材の開発と評価方法の蓄積

高等学校学習指導要領では、国語科の各科目の「内容の取扱い」に各領域における授業時数が明確に示され、「話すこと・聞くこと」の領域の授業時数は、必履修科目の「現代の国語」では20～30単位時間程度、選択科目の「国語表現」では40～50単位時間程度行うこととされている。つまり、「現代の国語」においては約３割～４割は「話すこと・聞くこと」の指導を行うことになる。しかし、高等学校においては「話すこと・聞くこと」の指導実践例は多いとは言えない状況にある。特に、高等学校学習指導要領では「指導と評価の一体化」の重要性が改めて強調され、観点別学習状況の評価のより一層の充実が求められており、従来「話すこと・聞くこと」の評価の難しさが指摘されている。本研究では、「話すこと」の「構成の検討・考えの形成」における指導法と評価方法について取り扱ったが、構成メモなどを「ワークシート」に記入させ、それと発表の様子とを見取りながら評価をしていく方法は有効だと考えられる。

今後は「話し合うこと」など、主にグループで言語活動を行うものについても、その指導方法や評価方法について研究が蓄積されていくことが重要である。

２　一人１台端末の活用

「話すこと・聞くこと」の指導と評価については、従来、音声を吹き込む方法や、ビデオなどで録画するなどして客観性をもった評価方法について研究が行われてきたが、端末の配備や性能などの課題があった。今年度から一人１台端末が全校に整備されたことを受け、文字起こしアプリなどを用いてスピーチ内容を文字に直すことや、振り返りをMicrosoft Formsなどで行い、主体的に学習に取り組む態度の評価を行うなど、より効果的な方法の一助として一人１台端末の一層の利活用を進めていくことが必要である。

３　国語科の果たすべき役割

「答申」で述べられているとおり、変化の激しい現代にあって、「次代を切り拓く子供たちに求められる資質・能力」は、「文章の意味を正確に理解する読解力、教科等固有の見方・考え方を働かせて自分の頭で考えて表現する力、対話や協働を通じて知識やアイディアを共有し新しい解や納得解を生み出す力」などである。この「読解力」や「表現する力」「対話や協働」に対して基礎的な言語能力を育むのは国語科の使命である。また、「高等学校学習指導要領」において実現を目指す「主体的・対話的で深い学び」では、各学習における話合い活動も重視されている。国語科はそのような学びの根幹となるような資質・能力を育てていくことが求められていることを踏まえ、それぞれの場面に応じた資質・能力を効果的に身に付けられるような教材や指導法、評価方法の開発が求められる。

現在、様々な社会情勢のなかで、コミュニケーションの場がオンラインに移行する場面が急速に広がっている。我々国語科の授業者は、日々変化する現状の課題と求められる役割を十分に自覚し、絶えず研修と実践に取り組むことを通して、その使命と責務を果たしていく必要がある。

令和４年度　教育研究員名簿

高等学校・国語

学　校　名	職　名	氏　名
東京都立新宿山吹高等学校	主任教諭	五十嵐　尚子
東京都立工芸高等学校	主任教諭	三澤　範子
東京都立芝商業高等学校	主任教諭	長野　和彦
東京都立城東高等学校	主任教諭	田中　拓也
千代田区立九段中等教育学校	主任教諭	◎　江尻　雅輝
東京都立三鷹中等教育学校	主任教諭	西本　光
東京都立大泉高等学校	主任教諭	玉腰　朱里
東京都立保谷高等学校	主任教諭	川上　絢子

◎　世話人

〔担当〕東京都教育庁指導部部高等学校教育課
指導主事　阿部　惣志

令和４年度

教育研究員研究報告書
高等学校・国語

令和５年３月

編　　集　東京都教育庁指導部指導企画課
所 在 地　東京都新宿区西新宿二丁目８番１号
電話番号　（０３）５３２０―６８４９